東京学芸大学リポジトリ
Tokyo Gakugei University Repository

小規模日本人学校における中学理科複式学級の実践

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2022-07-28 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 松本,晋 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2309/00174246

小規模日本人学校における中学理科複式学級の実践

前バンドン日本人学校　教諭
大阪府寝屋川市立第六中学校　教諭　松　本　　晋

キーワード：在外教育施設，小規模校，複式学級，理科教育

１．はじめに（地域及び学校の概要）

バンドンは，インドネシア共和国のジャワ島にある。人口約250万人のインドネシア第３の都市で，西ジャワ州の州都である。学校の所在地は，標高約840mの位置にあり，年間平均気温約25度，夜間は17度程度まで気温が下がる。首都ジャカルタから約200km離れた都市で2005年高速道路が開通し，週末にはジャカルタからの避暑地として栄えている。また学園都市でもあり，数多くの大学がある。初代大統領スカルノをはじめ，バンドンの大学からこの国の政治経済を担う人物が数多く出ている。

産業は「繊維の街」として有名で，以前は日系企業も多数あった。しかし，物価上昇と原料の価格上昇から徐々に日系企業は数を減らしており，日本企業の進出が盛んな首都ジャカルタとは異なる。

バンドン日本人学校は幼稚園，小学部，中学部が同じ敷地内にあり，個々の成長を見守りながらきめ細やかな12年間の教育実践が行われている。平成23年度は幼稚園５名，小学部９名，中学部５名の計19名である。保護者や地域の学校への関心は高く，PTA活動も学校に協力的で学校への期待も大きい。教職員は校長，教諭５名，現地採用１名である。また，インドネシア語と英会話は特別非常勤講師を迎えている。

２．複式学級決定の理由

児童生徒たちは，学年を超えたつながりが強く，男女間の協力もできる。勤労意欲も旺盛で，遊びも実に快活である。また，校内には生き物も多く，それらに対して興味を持ち，生活科や理科の授業を通しての体験活動も積極的である。しかし，限られた人間関係の中では考え方が固定されがちで，積極的姿勢に欠ける面がみられる。そして，言われたことを素直に聞き入れる面を持っているが，その反面家庭・教師への依存心が強い傾向がある。学習面でも少人数であるため，多様な考えが出にくく深まりにくい。そのため，学習姿勢は受動的で積極性に欠ける。

そこで，少人数のよさや複式学級のよさを生かした確かな学力をつけるために，中学３年間を一貫としたAB年度方式の複式学級を理科で実践した。

３．複式学級の内容

(1) 複式学級における学習指導の基本的な考え

・多学年で構成されることの「良さ」に着目して，指導方法を工夫する必要性
・児童生徒の実態把握項目
　①児童生徒の基礎的・基本的な学習内容の定着状況
　②児童生徒一人一人の学習意欲の状況
　③学習内容の系統性や理科の教科としての特質
　④今後の児童生徒数，学級編成の見通し
　⑤転入，転出児童生徒への配慮
　⑥保護者への説明と理解

本校の状況を考えると，同単元指導が有効と考える。

(2) 同単元指導の利点と問題点

【利点】

・経験領域の拡大と集団思考による思考の多様化や深化が図られるなど，思考のひろがりと表現力の向上が期待できる。

・協力的な学習が可能になり，児童生徒の人間関係が深まり社会性の育成が期待できる。

・実験，観察などの準備や学習の展開の効率化が期待できる。

・年間の指導計画が一元的になり，指導計画の作成，指導や準備等をまとまった視点から行うことができる。

【問題点とその対策】

・上学年の教材で指導を行う場合，下学年にとって難しく未消化になる恐れがあり，下学年に対応した指導や評価が求められる。

→語句（単元の学習に必要な知識）の説明をする時間を単元導入時に設定する。

・入学当初などは学校生活に適応することで精一杯であり，それを第一に考慮する必要がある。

・転出入の多い在外教育施設では必修内容の未履修の問題が生じる。

→転出入児童生徒が本来学習すべき学年の内容を未履修の場合は，個別に補充学習をする。

・指導時数に差が出る。

→他教科と調整する。

(3) 実践内容と結果（平成21年度～23年度　中学部理科）

平成21年度中学部入学生徒に対してAB年度方式の複式学級を実施した（中学1年生時に2年生理科を，中学2年生時に中学1年生理科を履修）。その後，3年生時のみ単学級での授業を行った。

3年生時に「日本国内の外部模擬試験」と「複式授業の利点と問題点についての記述式のアンケート」を実施した。下記の表の網かけ学年が実践対象学年である。授業形態の学年は学習内容を示す。

平成21年度			平成22年度			平成23年度		
	人数	授業形態		人数	授業形態		人数	授業形態
中1	2	複式	中1	1	複式	中1	1	単式
中2	1	（第2学年）	中2	2	（第1学年）	中2	1	単式
中3	1	単式	中3	1	単式	中3	2	単式

・模擬試験の結果

国語・数学・英語・社会・理科の5教科内で各教科の取得偏差値を比較すると，理科は英語に続いて2番目に良い結果となっていた。単学年指導の国語・数学と比較すると大きく差が出た結果となった。

・アンケートの記述

【利点】

・難しい問題でも解決することで慣れることができた。

・学年上の学習内容では上級生に質問ができた。

・みんなで実験や学習ができ，楽しかった。

・後輩に教えることができる。

・互いに教え合うことで授業がより楽しくなった。
・多学年が質問することで自分もよく分かった。
・学年下の学習内容の時は不安はなかった。
・学年下の学習内容の時，昨年度学習した内容を理解していたので，授業内容がとても分かりやすかった。
・分からないところがあってもすぐに質問できる。

【問題点】

・学年上の学習内容を学習すること自体が不安であった。
・授業について行けるか不安であった。
・学年上の学習内容は難しく感じた。
・言葉が難しく，教科書を読むことに苦労した。
・理科なのに，計算問題が難しく感じた。
・学年下の生徒が授業について行けているか不安であった。

４．研究の成果と課題

平成21年～23年度の中学部における実践では，複式導入時に生徒が学習に戸惑いを感じるなど生徒にとっては負担が大きいと思われる。生徒のアンケート結果にもあるように，これが今回の実践で最大の課題であると考える。これについては，少人数の良さである「個に応じた指導」で補足していかなくてはならない。

しかし，間接授業などを通じて自主性を身につけたことで，主体的に学習に取り組めるようになった。また，2つの学年が互いの学習について交流し合い，上級生に憧れを抱いたり，下級生にアドバイスすることで生徒に「自信」が付いた。そして，みんなで学習した方が楽しいなど，各々の学年の学習では得られない複式学級の特性を生かすことができたと考える。

模擬試験の結果を学習内容の定着の指標として見ると，複式学級での授業が効果的に作用できたと言える。

以上のことより，本校の理科においては，AB年度方式の複式学級は有効な指導方法の一つであると考える。

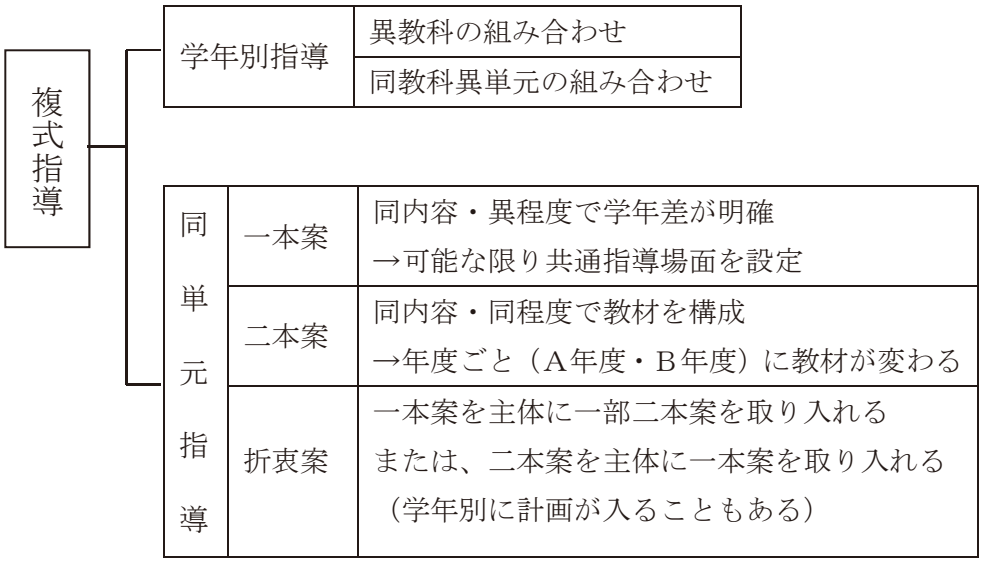
５．終わりに

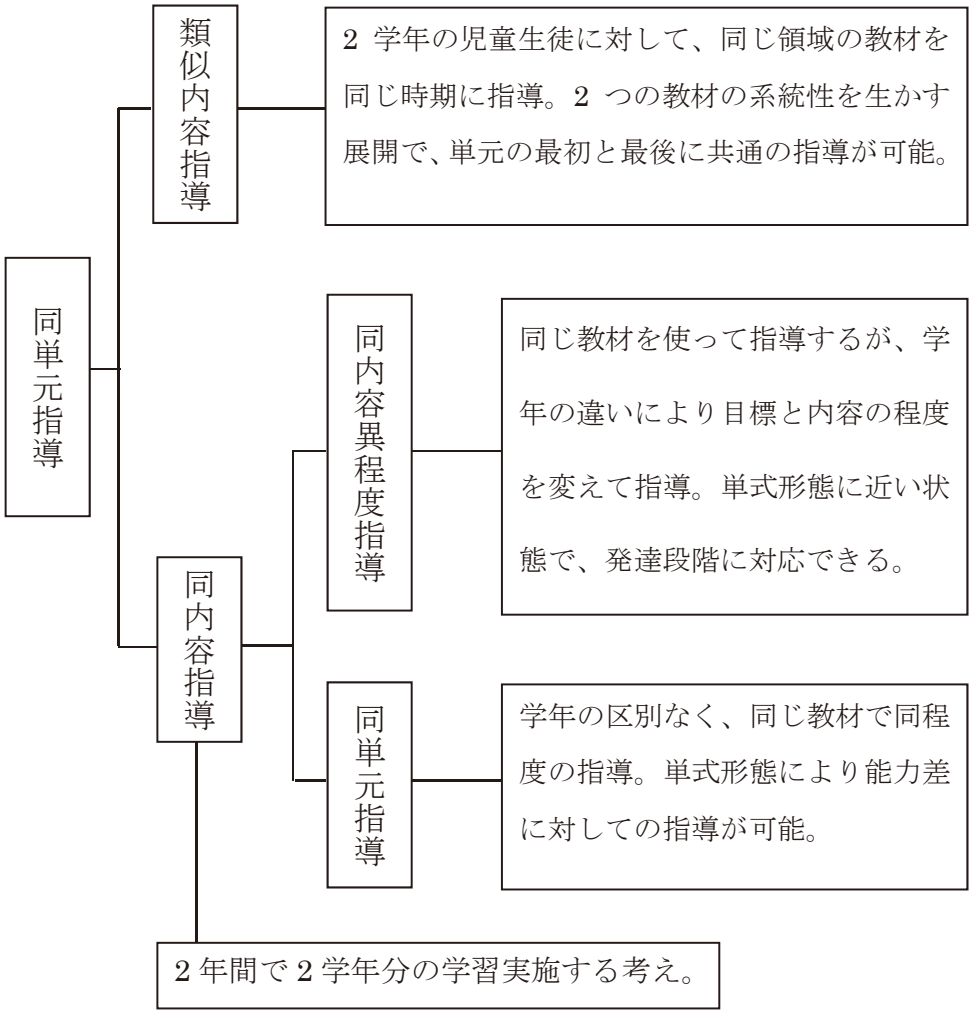
３年間のバンドンでの日々を健康かつ大変有意義に過ごすことができた。これは，ひとえにバンドン日本人学校の教職員と，日本から支えてくださった文部科学省および外務省と在インドネシア日本大使館，総領事館，そしてなによりバンドンでわれわれの生活を支えてくださったインドネシアの人々のおかげであると，心から感謝している。多くの人々に支えられて実現したこの３年間の貴重な研修を何らかの形でこれからの教育に役立てたいと考える。

参考文献

愛媛県教育委員会「複式学級学習指導資料」http://ehime-c.esnet.ed.jp/gimu/fukushiki/

※　複式指導関連図


複式指導
学年別指導
異教科の組み合わせ
同教科異単元の組み合わせ
同単元指導
一本案
同内容・異程度で学年差が明確
→可能な限り共通指導場面を設定
二本案
同内容・同程度で教材を構成
→年度ごと（A年度・B年度）に教材が変わる
折衷案
一本案を主体に一部二本案を取り入れる
または、二本案を主体に一本案を取り入れる
（学年別に計画が入ることもある）


同単元指導
類似内容指導
2 学年の児童生徒に対して、同じ領域の教材を同じ時期に指導。2 つの教材の系統性を生かす展開で、単元の最初と最後に共通の指導が可能。
同内容指導
同内容異程度指導
同じ教材を使って指導するが、学年の違いにより目標と内容の程度を変えて指導。単式形態に近い状態で、発達段階に対応できる。
同単元指導
学年の区別なく、同じ教材で同程度の指導。単式形態により能力差に対しての指導が可能。
2 年間で 2 学年分の学習実施する考え。